

魅せられて、私の「歌」道標

(最終回)



私と短歌との出会い

香川ヒサ

今風の言葉で言うとう、私はむかし、歌舞伎オタクだった。

小学校四年生の時、NHKテレビの舞台中継で中村歌右衛門丈の芝居を見た。それは実は、歌右衛門丈客演の新派の『瀧の白糸』だったのだが、ともかくそれ以来すっかり女形の芸に魅せられてしまった。小学校になじめないでいた私に、土曜日の午後の舞台中継を見ると、楽しみが出来たのだった。

中学に入り、遠出が出来るようになると、お小遣いを溜めては、東横ホールや歌舞伎座へ出かけた。特に、その頃東横ホールには、坂東鶴之助、中村時蔵、沢村訥升、沢村由次郎、実川延二郎、市川門之助等の若手の芝居がかかり、華やかで活気があった。プログラムを集め、『演劇界』を読み、郡司正勝や戸板康二の著書をあさり、『歌舞伎』と関連すれば何にでも飛びついていた。そんなある日、父の書棚にあった谷崎潤一郎の『源氏物語』に出会った。中村勘三郎丈の『末摘花』を見たのが、きっかけである。

ある時はありのすきびに憎かりきなくて

ぞ人は恋しかりける

『源氏物語』 奥人

心あてにそれかとぞ見るしらつゆのひかりそへたる夕がほの花

年ふれど此の契こそ忘れねおやおや

とかいひしひとこと

『源氏物語』

『源氏物語』

一首目は、『桐壺』の巻で、桐壺更衣が亡くなった後、心ある女房達が更衣の姿かたちがめでたかったこと、人柄が優しかったこと等を語り、恋慕う場面には、物語の語り手が「なくてぞ人は恋しかりける」とはこういう折の心持を詠んだのだろうと、引用している歌である。なるほどうまいことを言うなど、すっかり感心してしまつた。二首目は、『夕顔』の巻で、夕顔が光に「あなたは源氏の君か」と問いかけている歌だが、この二人の出会いと別れには菅原孝標女でなくてもハラハラドキドキした。美しくはかなく夢のような「夕顔」の歌とは、対照的なのが三首目、「朝顔」の巻の源氏侍の歌である。老婆が科をつくって戯れかかるという場面は、歌舞伎によくあるので、そのルーツを見た思いだった。

こんな風に、古典和歌とは歌舞伎への興味が高じたかたちで出会
い、歌舞伎をより面白く見たくて、『日本古典文学大系』も次々読ん
だ。そして、長唄の師匠にまでつくという程の凝り様で、将来は歌
舞伎の脚本を書きたいという夢もふくらんでいった。ところがであ
る。大学に入り、国文学として古典文学を学び始めた途端、私は打
ちのめされてしまった。

桜花散りてふことは今年より忘れてにほ
へ千代のためしに

『落窪物語』

植ゑしより茂りにします菊の花人におと
らで咲きぬべきかな

『堤中納言物語』

例えば右のような歌を解釈するのに、○辞書は大方『大日本国語
辞典』の孫引きであるから使つてはならない、○「桜花」あるいは
「菊の花」という言葉を使った歌を『国歌大観』で全部調べて、どん
な時どんな使い方をしているかを見た上で、「桜花」あるいは「菊の
花」という語の意を初めて決定する、というようなやり方が、そこ
では行われていた。楽しく面白く読んだりしてはいけないうのであ
った。当時、大学はその権威の解体されてゆく真只中であつたが、
国文学の世界のこんな片隅では未だ未だ「ヘーゲルの悪しき重流」
の残滓は健在だったのだ。今思えば、そういう方法にも多くの発見
があること、またその意味もわかるが、あの頃は「柳」が「糸」と
いう言葉と一緒に使われている割合は『八代集』では何パーセント
か等ということ調べてはならなくなる度に、生意気にも「だ
から、何なんだ。」と付け加えたい気持ちでいっぱいだった。最近、馬

場あき子著『女歌の系譜』を読み、綿密な調べによる学問的裏付け
と実作者の直観が一つになっていて説得力があつて面白く、ワクワ
クしたが、私の大学での四年間には、とてもワクワクする余裕はな
く、古典文学は次第に鬱陶しいものになっていってしまった。

けれども、皮肉なことに突然短歌を作る機会がやって来た。卒論
という悪夢の火照りもようやくさめた頃、祖父から電話がかかった。
祖父は、「おい、おまえを『白路』へ入れたぞ。来月から歌を作つて
出せ。」と言つた。その頃、祖父は森本治吉主宰の『白路』で歌を作
つていたのである。以前、母を『醍醐』に入れていて、今度は私ま
で引っぱりこもうとしている。「国文科を出たのだから、歌ぐらい出
来るだろう。」とも言つた。歌を作ることと読むことは違う、しかも
国文学アレルギーなのである。ぐずぐず断つていると、「なに、日記
のように作ればいいんだ。」と祖父は言い、電話を切つてしまった。
「まったく。」と思ひながらも、歌を作つて出したのは、祖父の言う
ことを聞いておけば、クリスマスプレゼントの一つも増えるだろう
と思つたからである。それから「日記のように」歌を作つては出し
ていたが、三年ほどで中断してしまつた。こんな動機では長く続く
はずはなかつたのだ。

そして、再び歌を作るようになったのは、それから、七、八年も
後のことである。何かものを書いてみたくなつたのは確かだが、動
機ははっきりわからない。歌でなくてもよかつたのかもしれない。
けれども、手の届くところに短歌があつたのである。祖父が、私の
休会している間もずっと結社に社費を払い込んでくれたのであ
つた。それからもう一つ、初めて現代短歌の面白さに出会つたとい
うことがある。母の書棚にあつた西村やよひ歌集『有情飛天』を偶

然手にした。

雨の駅に待つわれよりはたしかなり販売

機に絡む硬貨の音は

西村やよひ 『有情飛天』

夥しき卵のたぐひ春の灯に脆き内部のも
の積まれゆく

十四階スカイルームに昼の街みつゝめて

脚のどこか稀薄なり

現代を生きる個人の存在不安の表出した作品を次々に読んでゆくうち、現代短歌はこういうことも出来るのだと、衝撃を受けた。そして、一晩かかってノートに写した。てに、をはの使い方、上句と下句の対応、喩の用い方、そのノートから沢山のことを学んだ。現代短歌をようやく自己の表現として考えられるようになったのである。ところが、そうやって歌を作ってゆくうちに、今度は表現が袋小路のようなどころに入ってしまった。自分にだけしかわからない表現（ということとは自分にもわからない表現ということだが）となり、歌は次第に奇怪なものになっていった。けれども、どうしてもそこから脱け出せなかった。そんな折、よみうりカルチャーセンターに息子達の剣道教室の月謝を払いに行き、短歌講座を見つけた。そこで出会ったのが、米田登である。

米田登という人は、外部そのものという存在であった。異様なほどに言葉に即して歌の読みをした。常識的に表現者の意を汲んで、歌を解釈するというようなことは、たとえ初心者作品でも一切し

ない。そして、短歌の理論としては、「魂を入れた後、それを抜き去れ。」等と、禅問答のようなおおよそわけのわからないことしか言わなかった。従って現代短歌の表現の方法を教わろうと教室に入ったのに、そんなことは望むべくもなかった。月謝を払って来ているのにこれは何なのだと腹が立った。けれども、何年か通ったのは、米田登の、どのような初心者の作品にも真正面から批評するその愚直なまでの真つ当さに感ずるところがあったからだろう。しかも、今から思えば実は大変なことを教わっていたのだと思う。それは、「言葉は通じないものだ。」ということである。

何で表現の自家中毒みたいなことになってしまったかということだが、米田登という外部に出会うことで、少しづつわかって来た。それまで私は、受け取った表象を何とかして短歌という形の言語表現にしようと、言葉を追いかけていた。が、追いかけても追いかけても言葉は、自分の感じていることに届かなかった。それでもなお追いかけて、その結果表現は行き詰った。でも、それは間違っていて、始めから「言葉は通じないもの」だったのである。言い換えれば、言葉はそもそも決定不能性をはらんだものであり、従って言葉でものごとを写しとろう等とすることは不可能だということである。短歌の表現とは、ものごとをよく見て、見たとおりに、言葉を手段として五七五七七にすることだ、あるいは思ったことを思ったとおりに言葉で表すことだとばかり考えていた、それが全くのナイーヴな信仰であることがようやくわかった。自分がものごとを感受したと思った時、それが既に言葉に先立たれたものであるということ、言葉を手段とするのでなく、言葉そのものに賭けなくてはならないのだということ。こうして私の作歌の方法は百八十度転回した。



88年、角川短歌賞授賞式のパーティーにて。

香川ヒサ
(かがわ・ひさ)

1947年、横浜市に生まれる。69年、お茶の水女子大学文教育学部国文科卒業。88年、「ジュラルミンの都市樹」で第34回角川短歌賞受賞。90年、「テクネー」出版。92年、「マテシス」出版。93年、同著で、第三回河野愛子賞受賞。坪内稔典、足立晶子、黒木三千代らと超結社歌会「藪の会」を始め、「鱧と水仙」創刊。96年、「ファブリカ」出版。「好日」所属。現代歌人協会会員。

香川ヒサ
人あまた乗り合ふ夕べのエレヴェーター柵目
の中の鬱の字ほどに
白子雲鯨と思へば鯨に思へば鯨なるが
考く
マテシス
神はしも人を創りし神をしも創りしといふ人
を創りし
ファブリカ
人ほしも神を創りし人をしも創りしといふ神
を創りし
一冊の未だ書かぬ本のためかくもあまた
の書物はあめり

米田登の短歌講座に入ってしまったらしくして、「好日」に入社した。更に色々な批評が聞きたいと思つてのことだったが、結局「世に問う」しかないことがわかり、角川短歌賞に応募してみることにした。そうしたところ、

飛行士の足形つけてかがやける月へはろ
ばろ尾花をささぐ
『テクネー』

角砂糖ガラスの壘に詰めゆくにいかに詰
めても隙間が残る

種苗会社のビル耀へり下京区梅小路なる
秋のゆふぐれ

人あまた乗り合ふ夕べのエレヴェーター
柵目の中の鬱の字ほどに

かさはさか きゆはあはゆき くさはさ
く 循環バスは渋滞の中

等を含む「ジュラルミンの都市樹」五十首は、何と第三十四回角川短歌賞を受賞してしまった。その時の選者の批評は私の原点となった。やつと現代短歌と真に出会えたのである。それから十年、現在「鱧と水仙」という雑誌を出すようになった。坪内稔典、足立晶子、黒木三千代等十四名の同人誌であるが、忌憚ない批評の聞けることが何よりも有難い。今はそれに支えられて、歌を作っている。